

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	史学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	史学科・教授	上田 信 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	中国史上における日常食の研究 - 清～民国期、華中・華南地域を中心として		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・史学専攻・6年	中林 広一 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は17～20世紀の中国華中・華南地方を対象として日常食、すなわち日々の食卓に供される食事の実態について追究し、これまでのイメージに代わる新たな日常食像を提示するものである。

研究活動としては、従来「華中・華南＝コメ」という図式で捉えられてきた食物史像に対する検証を主たる作業に据えて行う。具体的には華中・華南地域において見られた日常食の諸相を明らかにし、また日常食と農業・移住・開発・市場・流通・都市・農村といった要素との関わりについても検討の範疇に加える。この作業を通じてコメ以外の畑作物が日々の食事において果たしていた役割や、日常食の背景にある社会的・経済的要因について確認していく。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[中国] [食] [農業]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は17世紀から20世紀にかけて中国華中・華南地域で日常的に見られた食の風景を検討の中心に据えるものであるが、その実像を提示する作業に従事するに当たって特に留意した点は日常食の地域性と階層性である。これらの点に着目するのは、食事をする人間の属する地域或いは社会的・経済的階層との関わりの中で日常食の内実が見せる差異を指摘することで、従来コメ一辺倒で語られてきた華中・華南地域の食のあり方をより実態に即した形で提示することができるためである。こうした意図の下で行われた研究の成果は以下のようにまとめることができよう。

1. 日常食の地域性

まず、日常食の地域的な差異を論じるに当たっては、湖南省永順府を対象地域とし、当地における日常食の内実に迫っていった。検討対象として当地を事例として採り上げた理由は、この時期にあって当地が開発のフロンティアであったため、長江下流域などコメの利用が盛んな経済的先進地帯との比較・検討を通じて、食の画一的なイメージについて検証することが可能であるという点に求められる。

具体的な検討作業としては、永順府における農業生産のあり方と日常食の内容の究明を中心として行った。まず、農業生産については、畑作物に大きな比重が置かれていること、また稲作はわずかながらに行われていることを指摘した。これは当地での生産形態が、大半が山地によって占められるという永順府の自然条件によって制約を受けていることを理由とする。

そして日常食の内容については、それが上記のような生産形態から影響を強く受けて形成されていたという特徴を明らかにした。すなわち、当地における食事はムギやマメ・トウモロコシといったコメ以外の穀物を利用する事例が圧倒的多数を占めていたが、それは畑作物に多くを依存する生産形態と当地での日常食が強く結びついていたことを示すものである。

こうした永順府における事例は、日常食のあり方がそれぞれの地域にまつわる環境のあり方によって異なった姿を見せるという食の多様性を顕示するものと言える。従来の食物史研究或いは農業史研究などにおいて食が語られる際には長江下流域を対象とした史料が用いられることが多かった。周知の通りこの地域はデルタを多く抱える稲作地帯であることから、この地の様子を反映させた史料を用いて食事の情景を描こうとすると、それは自ずからイネを主に据えたものになる。

しかし、永順府での日常食が示すように、そのような日常食のあり方を華中・華南地域に普遍的なイメージとして適用することは決して適切なことではない。ムギやトウモロコシの栽培が盛んで、イネはわずかしか生産されなかった地域では、その生産形態に合わせるようにコメ以外の穀物を利用する食事が日常的にとられており、そこにコメを盛んに利用する食生活は見られないのである。そして華中・華南地域には広い範囲にわたって山地が展開することから、永順府に見られるような日常食は例外的なものとして位置づけることはできない。これらの点を踏まえるならば、永順府における事例は華中・華南地域における日常食の多様性を示すものとして捉えることが可能であろう。

2. 日常食の階層性

次に、日常食の階層性を検討するに当たっては、清末から中華民国期にかけての湖北省を対象とした。ここで言及する食の階層性とは富裕層と貧困層という経済的な差異のみを採り上げたものではなく、都市部と農村部との間で見られる差異についても意識したものであるが、本研究ではこれら複数の社会的要素が絡み合うなかで日常食の内容がいかなる違いを見せるのかという点に注意を払った検討を行った。

なお、検討対象を清末から中華民国期にかけての湖北省に限定したのは史料上の理由からである。一つは湖北省には長江中流域に都市漢口があることから、当地に関しては地方志の他に日本領事館が発行した各種報告書も残されていること。もう一つは、漢口へ食糧を移出していた湖北省内の各地域についても中華民国政府が農村調査を実施しており、これらの史料を用いることで他の地域に比べて都市・農村間の比較・検討が行いやすいことである。以上のような史料残存状況を鑑み、本研究では清末から中華民国期にかけての湖北省を検討対象として選択した。

以上のような形で行った研究成果を具体的に述べると、まず都市部における日常食については用いられる食材の差異によって階層性が表出されていることが分かった。すなわち、富裕層が主としてコメを主体とした日常食をとっているのに対し、貧困層の間ではコムギを高い頻度で用いる食生活が見られたことが史料から窺われる。ただし、こうした傾向は、富裕層ーコメ、貧困層ーコムギという利用上の対応関係を明確に示すわけではない。それは利用頻度の差異として捉えられるべきものであって、富裕層の間でも低い頻度ながらコムギは用いられ、貧困層に属する人々も

研究成果の概要 つづき

また頻繁にはと言えないがコメを利用していたというのが実情である。とは言え、多くを依存する食材が階層ごとに異なることは確かなことであるが、一方で同じ食材を用いるにしても、その調理法には階層性が明確に現れている。例えば、貧困層がコムギをマントウ（蒸しパン）に加工して用いる場合には中に餡を含ませることはないが、富裕層の食するマントウは肉の餡や砂糖の餡など高価な食材を用いた餡をくるんで蒸かす調理法をとっていた。

次に、農村部での日常食に目を向けても、そこに階層性は見出される。例えば、史料には地主・富農・貧農に分けて日常食の差異について記すものがある。それによると経済的に最も余裕のある地主がコメのみを日常食として食していたのに対し、富農はコメとコムギを利用し、貧農はコメ・コムギに加えてオオムギやコウリャン・サツマイモなども用いていた。また、コメの利用法一つをとってみても、階層ごとに違いが現れる。地主層の間で粥が食されることが稀であった半面、貧農は積極的に粥を食しており、そこには貧しさと比例して粥としてのコメ利用の頻度が高まるという現象が見られた。

このように日常食の内容は都市・農村双方において富裕層と貧困層との間に差異を見せていたが、都市・農村間でもまた差異が発生している。同じ貧困層の食事でありながら、農村部では貧困層がオオムギ・コウリャン・サツマイモ等の作物に食の多くを依存していたのに対し、都市部の貧困層はコメ・コムギ以外の作物を利用することが少ないという対比がそこには見られたのである。

以上のように日常食は地域のみならず、食事をとる主体が置かれる環境によっても多様な姿を示していた。コメのみで日常食を賄うことのできるのは裕福な人々に限られ、それは全体の中ではごく一部にすぎない。そうした富裕層を除くと、そこに現れてくるのはコムギやオオムギ・コウリャンといった穀物類やサツマイモなどのイモ類を日常食に積極的に利用する食生活の姿なのである。

3. 多様性の背景

上に示したように、華中・華南地域における日常食の実態はコメのみで論じられるような平板なものではなかった。これらの地域ではコメ以外の作物に多くを頼る食生活が展開していたわけであるが、このような日常食のあり方を促した要素としては次に挙げるものがある。一つは各地における生産環境であり、一つは経済的階層性である。これらの要素については上で触れたが、繰り返し言及すると、華中・華南地域では、全ての地がイネの多収を可能にするような気候・地形・土壌に恵まれていたわけではないこと、またそのためにコメが華中・華南の民衆に万遍無く行き渡ることはなく、一部の富裕層にコメの供給が偏ったこと、これらのコメをめぐる状況が人々のコメ以外の作物に対する依存性を高めていた。

これらの要素は消費する側にコメ以外の作物の利用を強いるものであるが、一方で史料中には消費者が積極的にコメ以外の作物を日常食として利用しようとする事例もまた見出される。すなわち、農民はコメ・ムギなどの各種作物の生産に従事するが、これらの作物にはそれぞれに用途が定められおり、日常的に消費される作物にはムギ・コウリャン・トウモロコシ・サツマイモなどが用いられ、コメが自家消費用の作物として扱われることは少なかった。コメは都市に向けて販売され、都市の住民達によって消費されていたのであり、換金作物としての性格が強く、農民の間で食されることがあるとしても、それは各種宴会や来客のある場合など特別な食事の際に限られていた。

このように作物の用途が分化する背景には農民の持つ経営戦略が働いていた。コメは数ある作物の中でも市場価値が高く、効率的に銭貨を獲得できる作物であるため、換金作物として特化される。そのため自家消費用にまわされるコメの量は極力抑えられ、それを補うものとしてムギやコウリャン・トウモロコシ・サツマイモなどの作物が栽培され、生産者の間で広く消費される。このような消費の傾向が見られるのは、農民が各種作物の持つ市場価値を熟知した上で再生産活動の維持にとって最も有効な用途を各作物に充てる戦略的な選択がとられているからに他ならない。この農民の経営戦略もまた上記した二つの要素と共に利用作物の多様化を支えていた。

本研究の成果は以上の通りであるが、ここで明らかにしえた日常食の実態は、それが従来のイメージのような単純な図式からは遠くかけ離れたものであることを示している。すなわち、これまでのイメージが華中・華南地域の食をコメのみで論じていたのに対して、実際の食生活はむしろコメ以外の作物を積極的に利用し、日々の生活を食いつないでいこうとするものであった。地域や階層といった条件によって日常食の中に持ち込めるコメの量は大きく異なっており、また生活の資を確保するためにコメを商品作物として定め、その消費を極力抑える動きも見られた。これらの状況は単に食生活の多様化を生み出していただけではなく、食生活が自然的な条件や社会的な条件など数多くの要素の組み合わせによって成立していたという食の重層性をも形成していたといえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① なし

② なし

③ なし

④ 学会発表

「『穀』考 - 中国における『穀』観をめぐって」

(立教大学史学会、2007年6月30日)

「移住・開発と日常食 - 湖南省永順府を事例として」

(上智史学会、2007年11月18日)

その他報告書類

「中国史上における日常食 - 清～民国期、華中・華南地域を中心に」

(2007年度立教大学大学院文学研究科博士学位申請論文)